



八鹿青溪



貫徹 慎独 創造
養父市立八鹿青溪中学校 校報
(令和7年1月31日) 第32号



学校教育目標「ふるさとを愛し 自らを高め 未来への道を切り拓く 八鹿青溪っ子の育成」
八鹿青溪中 HP

小学生の作文「やくせなかった言葉～いただきます～」

校報「八鹿青溪」第26号・第27号で中学生からの新聞投稿を紹介させていただきましたが、かつて、ある小学生の作文にたいへんな感銘を受け、今でも残している新聞切り抜きがありますので紹介させていただきます。



“ぼくは今、海外で生活しています。夏休みに一時帰国して、以前所ぞくしていたサッカーチームの合宿にさんかしました。夕食の時、号れいの係に指名されました。コーチが、せっかくだから英語でやって、と言いました。新しいメンバーはぼくのことを知らないので、まず自こしょうかいをして、次の日のために気合いを入れてから「いただきます」を言うことになりました。ぼくは、はりきって前に出ました。英語の勉強のせいかを見せたいと思ったからです。

はじめはうまくいきました。自こしょうかいの後に「明日もみんなで一しょに、サッカーをがんばりましょう。」と英語で言いました。ところが、さい後に「いただきます」のかけ声をかけようとして、ぼくはこまってしまいました。英語で何と言えよいかわからなかったからです。しばらく考えて、けっきょく「いただきます」と日本語で言いました。

家に帰ってからも、そのことが気になっていました。それで、ほんやくのアプリでしらべてみました。すると、とんでもないけっかが出ました。なんと「いただきます」は英語で「Let's eat」だと言うのです。それはぜったいにうそだと思いました。「いただく」が「もらう」のけい語だと知っていたからです。だから、英語のやくを自分で考えました。けれど、「I will receive this.」とか「I will have my dinner.」とも少しちがう気がして、ますます悩んでしまいました。

ぼくはこのことを家族に話しました。お父さんも、お母さんも、お兄ちゃんも、それはやくせないと言いました。お母さんが、動物や植物の命をいただいていることに感しゃして「いただきます」と言うことを教えてくれました。それに食べ物を育てたり、運んだり、作ったりしてくれた人たちにも「ありがとう」の気持ちで言うのだと言いました。ぼくは、一度の食事ですぐいぶんたくさんの人や動物や植物に「ありがとう」を言うのだなと思いました。しかも、一日に三回やるから、本当にすごくたくさんです。

それなら、「Thank you for the food.」がよいかなと、一しゅん考えました。でも、やっぱりそれではだめです。「いただきます」の、すごくたくさん「ありがとう」は、英語ではかんたんに言えないと思いました。そして、それはすごい日本語だ、と思いました。はじめはやくせなかったことがくやしかったけど、今は、日本語にはとくべつな言葉がある、ということがわかってうれしいです。”

【小学3年生 インドネシア 令和6年2月27日付け読売新聞】

普段の食事の前になにげなく発している「いただきます」の言葉ですが、それには深い意味が込められていること、そして、それは長年にわたり我が国で受け継がれてきた大切な精神であることを認識させる作文です。我が国の素晴らしさを小学校3年生の子どもからあらためて教えてもらったような気がしています。

部活動の地域展開(地域移行・地域連携)

令和5年度校報「八鹿青溪」第24号(令和5年12月12日発行)、令和6年度校報「八鹿青溪」第28号(令和6年12月24日発行)で「部活動の地域展開(地域移行・地域連携)」について少し触れておりますが、あらためてその概要について説明させていただきます。

まずこの課題の背景について以下にお示します。



- ① 少子化の進行により、学校単位での部活動の存続に関する困難性が急速に深刻化している。
※既存の部の廃止、複数校による合同チームの編成等
- ② 必ずしも専門性を有しているわけではない教員による部活動指導は過剰労働の一因になっている。
※長時間労働、休日出勤等

上記2点により、学校部活動がすでに持続可能性の危機に直面しており、国を挙げて早急に部活動改革を推進する必要がある(スポーツ庁、文化庁:文部科学省の外局)としているのです。

国の示す部活動改革推進期間

令和5年度から令和7年度中に各市町において地域移行を進め、令和8年度からの実施を目標とする。

たしかに、八鹿青溪中学校区でも少子化は急激に進んでおり、既存の部の廃止(例:令和6年度に女子卓球部廃止)や合同チーム(例:野球部、吹奏楽部が関宮学園と合同、ソフトボール部が養父中学校と合同)を編成することなどをこれまでに行ってきました。

さて、国の方針によりますと、部活動改革は各学校単位ではなく、それぞれの地域の実情を踏まえて各都道府県・各市町村単位で推進するものとされており、養父市教育委員会としては、「当面の部活動のあり方」として以下の方向性を示してくださっています。 ※1月21日(火)令和7年度入学説明会での養父市教育委員会説明による

① 地域クラブへの参加(地域移行)

学校部活動への入部は任意。放課後や休日、学校の部活動以外の活動に参加することができる。学校部活動に所属せず但馬内で地域活動(スポーツ・文化芸術)をする場合は、参加に係る経費の一部支援を来年度も検討する。 ※「中学生の地域活動参加者支援金」

② 部活動指導員の配置(地域連携)

専門的な指導による活動の充実を図るため、地域人材が確保できた学校部活動に、部活動指導員を配置して子どもたちの指導にあたる。

③ 合同部活動の実施(地域連携)

部員不足により大会等への出場に支障をきたしている場合や、多数の方が活動しやすい場合等、市内の学校で合同チームを編成する場合がある。

この養父市教育委員会の方向性は「地域移行・地域連携ハイブリッド型(地域展開)」と呼ばれるものであり、当面の間、学校部活動を存続させながら、「地域移行」を模索していくという考え方になります。

さらに養父市では、「養父市部活動のあり方検討会議」を設置し、国・県・但馬各市町の動向を注視しながら将来的な方向性を常に検討してくださっています。今後なんらかの新たな方針が示される可能性もあります。